研究ノート

フォルカー・ブラウン（Volker Braun）「未来との永遠の取り組み」

“Die ewige Beschäftigung mit der Zukunft”に関して

酒　井　明　子

ここでは，2009年にフォルカー・ブラウンが，ブランデンブルク州ラインベルク市より，市代表の文学者として文学賞を授与した際の講演「未来との永遠の取り組み」を扱う．州の文化科学省と，作家クルト・トホルスイーを記念した文学館「ラインベルク城」により後援されている．

フォルカー・ブラウンは，故郷ドレスデンで，印刷工，鉱山労働の仕事に従事した後，ライプツイッヒ大学で哲学を修め，学生時代より詩を書き始め，60年代半ばから，ベルリンの劇場作家として活躍した．1939年生まれの旧東ドイツを代表する作家の一人であったが，詩，短編小説，戯曲，評論の分野で，社会主義の抱える問題を批判的に見つめ，当時，社会革新のために，ペンをもって奮闘する．現在，ベルリンに在住し，統一後のドイツを，世界の激動を，鋭く見つめ，その作品の中で，真摯に語り，問題を指摘し続ける．ブラウンにとって，統一20年を超えても今だ格差を乗り越えられない東西ドイツの現状や，貧困，老人，環境などを巡る社会問題は，書く手を休めてはいられない対象である．また，青年期を建設的な夢とともに過ごし，社会主義の中に民主主義的な手立てを希求し模索した壮年期を過ごした国，今はなき未熟な国であった故国に対する哀愁の思いが伏線にある．それは読者の胸をそこはかとなく締め付ける．近年，そうし

た過去の社会で懸命に生きた人々を一種の哀感をもって描く作品も目立つ．第二次大戦で兵士となる父親に対する留守を守る母の愛情を巡る苦しみを描いた「昼食」"Mittagsmal"（2007年）[1]や，東ドイツ時代のドン・キホーテ的な鉱山労働者の親方と労働者達の交代勤務の日常を描いた「愚作又はラウフハンマーのフリックの労働交代ノート」"Machwerk oder Das Schichtbuch des Flick von Lauchhammer"（2008年）[2]などに，感じられる．また，2000年に，受賞が遅過ぎると言われながら，革新的文学者ゲオルグ・ビューヒナーを記念して優れた進歩的文学者に出しているビューヒナー賞を，受賞している．次々と話題作を発表し続ける多作作家である．

わが国では，浅岡泰子氏始め，ブラウンの研究はきめ細かにされてきたが，まだまだ書き続けている作家を追いかけるのは並大抵ではないように思える．というのは，ブラウンの知識の大きさ，広さ，深さから，その作品には自らの考えを赤裸々に，または，ときがたい謎解きのような形で，たっぷりの皮肉とメタファーによって描き続けていることは良く知られ，縦横無尽に，他の作家の作品に触れ，引用し，指摘するだけでなく，その表現が，ブラウン独特のスタイルをもち，理解が難渋であること，日本語に翻訳することの困難さなどに，専門家は苦闘するからでもあるだろう．

取り上げた「未来との永遠の取り組み」では，その表題からして，作者のこれからの世界に対する探索の姿を絞り出していると考える．ブラウンは，ここでは，すでに東西問題ではなく，グローバルな世界の未来を視野の中心に据えている．一台の乗合馬車に乗り合わせた複数の人物の語り合いから議論が発展する．短いこの評論的な短編小説，または，短編小説的な評論は全部で，７章と後記の項目で成り立っている．文は表現の裏に別の意味を暗示させ，さらに裏の裏の意味を持つものがいくつもあり，非常に難解な表現が続く．紐解くのは容易ではないが，各章ごとに問題点を指

摘，解説することに挑戦してみたい．

1章

26行からなる詩形式で構成される．一行目最初の Sie は女性名詞 die Zukunft 未来を指し，以下，sie はすべて未来を指す．主旨は，「定義不能の汚水が年月の敷居を越えて押し寄せる」，と現状の醜さが未来に向かっていることをメタフォリックにのべ，未来はもう未来が望むようにはできないのだ，未来が礼儀正しくなかったら，気をつけなさい，私達はどんな状況も考えておかなければならないのだから，と言う．「一体，私達は未来があることをどこから知ったのだ」[3] と，未来を認識しようと，危険をきっと冒すことになるかもしれない．または，「未来はもう私達を立ち去ってしまったのだから，ドアが開け放されているのか？」[4] と，こんな調子で，現代の我々にとって，未来はあるのかとむしろ否定的な不安で問いを発することから始まっている．

2章　泥沼の中の荷馬車（Der Karren im Dreck）

18世紀の交通機関，泥沼にはまった馬車について，当時のフランスの作家マリボウ（Pierre Carlet de Chamblain de Marivaux）[5] を話のきっかけとして語り始める．当時泥沼の乗り合い馬車は，先に進むために，二頭の馬や一泊の滞在を求め，解決ができただろう．事故の際には，客を退屈させないように，彼らに即興の物語を語らせたりしたが，現代の泥沼の乗り合い馬車というとき，それは世界的出来事，つまり，経済危機，世界秩序戦争，天候の異常のグローバルな事実に抜き差しならずはまり込んだ私達の社会と言う乗り物である．マリボウの語る馬車では，ぬかるみの中で馬が立ち往生しても，中にいる小さな仲間の旅人達は語り合う．現代では，社会や国家がその役割を演じて，眉唾な話を語ったりするのだ．

このマリボウの馬車に今座っているのは，現実主義者の銀行家であり，

社会主義的空想主義者の母親と若い娘，芸術家，そして社会民主主義者の御者である．この馬車は，これらの乗客の会話で現代のいわゆる泥沼を走る馬車になっていることがわかる．愛をテーマに書いたマリボウらしく，年老いた銀行家は，若い娘に色目を使いつつ，「愛は未来を持たず，現在であり，発生の中にのみ意義が存在する」[6] と甘い言葉をかけながら，＜資源に基づいてエネルギーを集めるために，大口予算口座に払い込む必要があり，グローバルな競争に勝たなければならない＞と言う．母親は，「ウォールストリートの違反行為にも拘らず，理性的な経済的なアイディアが世界を独占している．……物質的な欲求に奉仕するのみでなく，承認と自尊への副収入を分配すべきである．他には，原則と社会的制度の進歩は全くない」[7] と強く述べる．更に，「もし人類がそのもっとも基本的な憧れを満足させるならば，歴史は終わるのだ，とマルクスもエンゲルスも信じていた」と続ける．そして嬉しそうに「我々はそこに到着したのだ」[8] と叫ぶ．芸術家は，冷静に，「私は建設的になることを評価しない．止めることが，基本的方向が影響を受けない限り，賢明であろう」[9] と言い切る．「溢れるより止めるほうがよい」と，中国の７億台の車の数で，呼吸用空気はほんのすこしになっている，と付け加える．更に，「我々は降りよう．全く間違って走っている．一体全体，何が我々を駆り立てているのか？車の後ろにつき従うのではなく，前に立って！」[10] と．この芸術家の，車から降りよう，と言う言葉を聴いて，御者は自分の仕事が奪われると心配して会話に加わる．彼は，馬車の傷がわかっていながら，上司を傷つけないように，錆を取ったり，油を差したりしている恐らくは社民党支持者．ブラウン曰く，社民党は，末端にいる更なる弱者を避け，党と党員を連れてゆき，声を抑えて改革は正しかったと唱えると．社民党に対する皮肉があふれる．最後に，若い娘が，みんなの会話に耐えられなくなり，叫ぶ．「ノー．地球の最大の寄生虫である人類が強制するこの章はやめましょう．所有者達の掴み取り，文化の野蛮性，広告の津波，すべてが

1塊となって……」[11]と．破壊された現存する世界を修繕するために，資材が消費され，お金が支出されるが，「しかしながら，基本的な欠陥はますます見過ごされる」[12]と，すでにはっきり現代に焦点が当てられ，我々の胸に突き刺さる．「真実は外にある．私達は悪夢から目覚めなければならない．私達は自分達が根本的に変わらなければなりません．自然と人間が語るのです……」[13]と．

これらの乗客の異なる意見の陳述の前に，著者ブラウンは，未来への思いを次のように導入している．「私達は喜んで未来へ視線を向けたい，未来のなかで，行ったり来たりしている不確かなものを，静かな念願によって，私達の有利になるように，こちらに引き寄せたいからである．」「未来は予見しようとするものではなく，可能にするべきものなのだ」[14]と．

3章　未来の博物館（Das Museum der Zukunft）

どこに未来はあるのかと，我々が探し求めてあけたドアは二つある．第一のドアは，もう今はない宮殿の美しいドアであり，取っ手もその後ろに伸びる階段も気持ちよく使い古されている．大きな広間には，高貴で上質の骨董品や天体望遠鏡などが戸棚に収められている．重い木箱の中には，貴重な消耗された地下資源：石炭，褐炭，石油の樽などが入っており，どんな権利で掘りぬかれたのかわからない地球の母体から奪われた，瀝青ウランやウランも．銀，銅，鉛，錫も同様，自由にもはや手にできない．18世紀のロマン主義作家ノヴァーリス（Novalis）がかつて語った作品にある美しい風景も，教会の讃美歌集などが並ぶ壁面書架で，一群の成果とともに朽ち果てる．ここでは，「それらは一つの記念物であり…，失われた，置き忘れた，消費された無駄になった可能性が記憶されており，つまり，返却不可能な瞬間や，もはや到達し得ない目的」[15]が展示された真剣な美術館である．

ブラウンは，ここで，「あの悲劇的な指導者」としてゴルバチョウフを挙げ，その大きな提案，つまり，2000年までに，すべての兵器は廃止するという提案が「歯が立たなかった．失われた未来よ」[16] と，この美術館に陳列をさせている．今，このことをも，「人が悲しみを伴わず散策できる保存された墓地の風化した墓石のように，壁に寄りかかって見つけるのだ」[17] と言う対象に引き込んでいるのだ．

4章　未来の地下牢（Der Kerker der Zukunft）

二番目のドアは，一番目と異なって，冷たい光と監視人に導かれる産業地下墓地まで続くドアである．ここには，事実（Tatsachen）と呼ばれ，喜ばれないものが集められている．「ごみ集積場と汚水処理施設の中でぶつかり合う陰気な水溶液」[18]，ドイツのゴルレーベン（Gorleben）やシュトウットガルト（Stuttgart）がそのための都市として知られるが，前者は，核廃棄物の最終処理施設の町として知られ，最近，フランスから送られる核廃棄物移送に反対する大規模デモが行われている．そこでは，何かが構造上いびつで，正しくない．あまりの多くの禁止，新しい禁止と建設がもたらす間違った空間，構造と法律の強制……．確実な危機といつもの勝手気まま．「人は進歩を刻んで，足かせを身につけた」，「未来は現状でさすらう」などの表現が鋭い．「未来の地平線を極端に開こうとしたことは，20世紀に，同じように未来の地平線を極端に狭めてしまった」[19] と，作者はこの牢獄の看守に言わせるが，まさに，この世紀を生きてきた我々のなかに，真実であることを疑うものはいない．自ら開けていると呼ぶ社会の未来は，関与するものたちに植民地化されるとも言っているが，皮肉を込めたこの文章も厳しい．そして，この世紀で人間が行った，憎しみと不遜から結果したことの恐怖の中心にあるものとして，ブラウンは，日本の広島での体験の一ページを挙げる．「そのもっとも恐ろしいものは，踏み段の上に影を燃やし続けたのだ，広島で人の影を」と述べる．看守は更

に言う．「未来の部屋は閉じられる可能性がある」[20] と．「政治的な困窮の配給，給料次第の卑屈さ，我々の失業状態の忍耐」[21] が我々の周りにあり，更に我々は暗闇を行く．ウォールストリートの中心で，黒人大統領オバマは「未来は我々の手の届かないところにあるようだ」[22] と述べることを挙げ，大国の未来感にももはや魔法は無いことを提示する．非常にネガティヴな未来感である．

5章　未来の工場（Die Werkstadt der Zukunft）

大勢の人々が並ぶ前には大きな閉じられた扉がある．ブラウンと思われる“私”はその出入り口を無理やり通り抜ける．みんなが通れるとは限らない扉を．“私”はある鋳鉄でできたホールにたどり着くが，そこには，未来を行くために集まった“我々”が集まっている．

そこに，一つの見過ごせない作業机があり，その上には，はっきりはわからないが，＜欲求＞や＜期待＞や＜体験＞が乗っている．

私が自分の土地から持ってくるものは失敗，破滅の＜体験＞である．安く奈落に落ちた東ブロックの，そして，高価でもつれ合った優先状況に西側の災難が潜んでいる体験である．我々は，未来が作り出される仕事に関心がある部屋にいる．「過去はまだ十分そのままにされていた．さび付いた問題，悪臭ある争い，すべて未処理のもの，未支払いのもの，一つのミレニウムから次のミレニウムへだらだらと続く．抑圧の領域，一度も正しく現れてこない正義，まだバリケードが立ちめぐらされている，潜在的な義憤のために．……新しい危機の土台……何十億の人々がその分け前を求めて乞わなければならない，単なる空気を，きれいな水を？……」[23] と過去が清算されずに未来に積み残される現実の厳しい状況を，提示するのに躊躇の気配はない．危機の中に，さらに極端な戦争が脅かすのを見るのは，18世紀の学者ホブスバウム（Hobsbawm）[24] である．ここで，著者は，再び，自ら言葉を引きついで，北米がゴルフ湾紛争を軍事的に解決し

ようとしたことを指し，不幸なアメリカがと述べ，新しい世紀に新しい歩み方がこじつけられたと言う．我々の馬車は，郵便馬車であり，装甲車にもなり，自動車にもなる．「私達は知識はあるが，それを乗り越える思考がないのだ」[25] は，高等教育で武装し，高度な文明を発展させてきながら，それが世界を破滅の方向に導いていることに気づかない，気づいても，その方向転換する力がない我々現代の知識人に向けた手痛い一喝である．

「しかしながら，下からの一つの文化がある」とブラウンは希望が全く無いことではない期待を描こうとする．これを「把握しにくいが一つの原素材，原型質的な運動，一つの市民の力」と繋げ，「人類学者や存在論者が可能な存在 Sein の方向を開こうとしているのが見えるとする．」それは，「第一に付加価値に方向付けられない社会の自然との新陳代謝」，「生産者に対する生産の支配からの解放」，「資本主義的な分配形態を超える社会」などが挙げられる．いわく，「基本的なスープをかき混ぜること」は，「理性の狂気の沙汰：その関連を破壊すること」[26] なのだと．そして作者が思い至ったのは，過去のものだった事柄，つまり，「低いスタンダードをもったより高度の生活形態」であり，それが彼の言う“未来”であり，それを「私は体験した」のだと述べる．それは「処分権利のない共同の所有」であり，「明日のための労働という必然的な拘束のなかでの愛の分野を捨て去ること」，つまり，労働に縛られて自らを犠牲にすることにまい進するな，と受け取るが，また，「消費の戦場のナイフの中にユートピア共和国の列を」と列記する．この章の最後に，著者は，「地下に何かを忘れている，かなづちか，鎌か，コンパスかを」[27] と述べるが，これは，嘗て労働者として働いた炭鉱という職場の記憶であり，同時に，かなづち，鎌，コンパスは，今は亡き労働者の国として出発したことを象徴する旧ドイツ民主共和国（東ドイツ）の国旗に示された絵柄である．彼の心の中に置き忘れたように感じられる貴重な記憶二つは，ブラウンの中で半ば永遠とも言える体験だったようである．その体験は，既出の “Machwerk” で

も，非常に読者を引き付ける主人公の炭鉱夫の中に描かれている．そして，その地下に置き忘れられたもの，それは，「不確かであるが，何か我を忘れさせるものであり，そのもののために，世界は作られてあるはずだ」[27]と．この部分は，同時に，著者が読者に深く考える宿題を課しているように感じられる．世界は，人間がその生を充足して生きることができる状況であるはずであるが，過去も現在もこれを達成できていない．未来はこのこれまで達成できなかったことを手にするためにある．それは，高度で，便利で，自然を利用しつくした結果手にするものではなく，低い生活スタンダードにあえて戻って，且つ，自らが夢中になって生きることができること，それがより高度な生活なのだ，と．そして，それを，人々はどこかに置き忘れていると述べているのが，筆者の分析である．ブラウンが，それを，自らの労働の体験の場，炭鉱に，そしてそれは，その背景にある亡き故国にたいする愛惜とともにあると暗に示唆していると，理解できるのではないか．もし，そうであればその場はブラウンにとってそれほど充足の労働体験だったことになる．

6章

再び13行の詩で構成される．「もう愛すべき…未来の設計を描くことはできない」[28]，という悲観的な句で始まる．＜長いこと未来を描き，その文字で暗い広間に明かりをともそうとし，次の10年に対して，永遠の真実をつぶやいてきた＞が，「この世紀は，たくさんのほのめく目標に息も絶え絶えに追いつき，道路を踏みにじり，滑走路はコンクリートづけにされ，そして破壊された．」「どこに私達は暖かい土地を再び得られるのか．森に？車の中に？」と問う．「未来の権利のために，おのおのの方法で，仕事の方法で，機械に支えられて，闘う」，「我々の思いは，湿地や草原に助けを求めるが無駄である，我々はその水を埃に吸わせるために堀り流すのだ．」[29]風景の連なりに，「誰もその最後を知らない．誰もがその最後が

来たことを知っている.」この矛盾した表現の二文の“das Ende”は再び解釈に苦労するが，その上に述べているコンクリートづけ，機械づけになっている我々の環境が，自然を破壊し続けているという内容の連続であるゆえ，誰もが，その文明の，つまり，破壊の行き着くところを知らないが，我々の生きる場の最終の姿が来ていることを知っている，と解釈すべきか．将来への可能な絵があるとしても，それは「この終焉状況をすすけた紙に描き出すのである」[30]と．

7章　自由な空間（Freiraum）

4番目のドアを探すが，無駄である．「未来を見るためのほんの覗き穴が我々に残っているだけだ．前方を覗くが，そこには何もない」，何もないことを私，著者はわかっているのだがと．「この4番目は秘密に満ちた部屋なのだろう．…その部屋はまさに空で，整理されず，それがほんのちょっと軽くきれいな印象を与える．自由の香りを．それは，家具などが散逸し，ありのままの広さが目にできる古いお城，整理されなければならない場所のように」[31]，と比喩する．

“私”の心配は，そのまだ秘密が残る空間に我々はどれだけたくさんのもの，どれだけたくさんのごみを積み上げるのだろうということでもある．未来が目の前に立っているとするとそれは一枚の絵であり，それを描こうとするなら，「どんな筆で描くのか．希望と言う筆で？不安で？」「ノアの洪水は，日常の汚泥であり，廃棄物であり，データの洪水である.」「世界の衰退は確信されているし，ユートピアと言う国とは我々は一度も外交関係を築いていない.」[32]『神よ！私は，一人一人が同じ条件のもとでその分け前をもてないものは何も望まない』というウォルト・フィットマン（Walt Whitman）[33]の過去の言葉は，今も現実的であり，そのビーフレットは，例えば，ドイツの放射能廃棄物最終集積施設のあるゴルレーベン（Gorleben）やメキシコ人口最大都市オアハカ（Oaxaca）で，市民の抵抗

運動で応用される．従がって，「未来は，書かれた書類ではなく，放水車やコショウで印刷される」[34] と多くの国の市民にとって，まだ，力のある側への抵抗によって得られるものであることにも触れる．

「おそらくは，未来の二律背反はより大きく厳しくなるだろう，そして人間性はより厳しい状況で要請される．」[35]「人類は，世界とともに，十分よくも悪くもある未来を荷う．」「私は，未来が激しく戦い，負けるのが見える」とのべ，「私は未来を見ない」という文章に続ける．「人間は，未来をもう知ることはないということを計算に入れて生きなければならない，もし，他の未来に向かって生き始めなければ．書かれた未来の筆は可能性を示していると言う点でしっかりしており，決定的な解決を示していない点で薄い．が，まだ何も考えられていないとか，単なる必要から暴動が起きたのだとか，言い訳じみたことを言う代わりに，書かれた紙を破り取るには，その量は十分ある」[36] とし，「確実に思い誤っていること自身の中に，解決の芽がある」と断言する．そしてこの章の最終宣言につながる．「恐らく，人間は再度新たに説明されなければならないだろう，そして本来の仕事はまだ全く始まっていない．その仕事とは社会をあっと言わせるだろう．」 そしヘルダーリン（**Hölderlin**）の言葉と，それに続く未来への思いを希望の予兆を感じさせる形で述べる．『より大きな願望を私達は孫にとって置く．』「そして愛とは，本論に至るのだが，世代，種である．未来は混血だ．私達は，風が涼しく吹き付ける場所にいる，あしたの朝のように—．」[37] 非常に詩的な美しい結びである．

後　記

7行の全文を訳出する．この追記が，その難解な本論全体に関して，文学者ブラウンの思いをさらに伝え，理解の補完となることを願う．

「ここに，泥沼の乗り合い馬車の中に置かれたままのあの紙片を私はまだ持っている．『解説の方法は，常にある情報が楽しめるか退屈

かの唯一の原因である.』著者が，その貧しいストーリーを慰めるために，我々にそのことをそっと教えた，そしてそれは我々の場合に当てはまる．歴史が如何に作られるかの方法は，その社会の緊張と気分の基本である；そのやり方，つまり，どのように問題と取り組むか，そして紛争を乗り越えるか，は文化の尺度である；その取り組み次第が未来を作って行くのである.」[38]

全体についての追加的解説

この７章と後記からなる作品は，１章で未来はどこにあるかという不安な問いかけでスタートし，２章で18世紀の泥沼を走る幌馬車を登場させ，５人の人物にそれぞれ違った立場で発言させ，論争を展開させる．しかし，その泥沼は，現代の社会にいつの間にかスライドしている．そのばらばらな意見を引きついで，３章以降，すべて，著者ブラウンの未来にたいする思いが吐露される．５人の幌馬車の乗客のうち，進歩をストップさせよ，という芸術家に，ブラウンの思いが反映している部分が多いと取れるが，つなげて，現代の世界の諸問題や関わった政治家が実名入りで語られ，読者の思いは，ぐっと現代に引き寄せられる．ブラウンは，50歳まで旧東ドイツで活躍したが，そこで社会的な矛盾を見，そして統一後の社会でもその矛盾を文学の中で鋭く指摘し続けている．以下，「本当の望み，フォルカー・ブラウン作品集（Ausgewählte Werke)」の中で，日本の皆さんへという挨拶で次のように述べている．

「私は二つの時代を生きてきましたが，それはやはり一つの時代でした．廃墟となった街と分断された世界の中で成長し，一つの社会の始まりとその挫折を体験しました．未熟な初期社会主義が破綻し，再び馴染みの資本主義が戻ってきたのです．歴史の後退と言えるかもしれませんが，その後退に私は関わったのです．進んでというわけではありませんが，いやいやでもありませんでした．なにしろラディカル

な革新だけが新たな発展を生むのだという希望を抱いていたものですから.」[39]

で述べるように，進む先に新しい変革を望む姿勢は常に変わらない．本作品の中に，旧東ドイツの心象風景が感じられるところは一箇所のみではない．また，その理想を現代社会が<置き忘れたもの>として暗示するものにも，それが感じられる．しかし，ブラウンは，東西統一問題がさまざまな矛盾を抱えていることは，横において，この作品では，よりグローバルな人類の行くべき先を求めて，描くことに力を注いでいる．かなり，悲観的な思いを隠せずにいると言えるが．

憎しみがもたらした9.11の命の喪失，インドネシアや昨年の3.11の未曾有の天災による無数の命の喪失，そうした不幸は現代人が乗り越えていない人間力に原因があると言って，否定できない．さらに，今回，天災の先に広がった恐ろしい原子力のコントロールの破壊と言う問題は，まさに我々の力が，思考が，基本的なところで，脆弱であり，生命の維持，継続という観点すら射程にないという人災につながる不幸であることを証明している．こうした時代であるからこそ，ブラウン達心ある文学者は呻吟しながら，真実を伝えるために，その表現の姿を捜し求めるのかもしれない．「文学とは矛盾を極端な形に駆り立てなければならない」はブラウンの言葉である．[40]

注および内容解説引用箇所など

（1）"Das Mittagsmal" は2007年 Insel 社より出版され，「昼食」として，商大論集大42巻第1号で，筆者翻訳発表済み

（2）"Machwerk oder Das Schichtbuch des Flick von Lauchhammer" は2008年，ドイツ，フランクフルト　アム　マインの Suhrkamp 社で出版される．翻訳は未刊行

（3）"Die Ewige Beschäftigung mit der Zukunft" P.2, l.20-21

（4）ibid p.3, l.6-7

(5) Pierre Carlet de Chamblain de Maribaux (1688-1763) フランスの劇作家・小説家，巧みな心理分析と機知にとんだ笑いのある内容を特徴とするが，詳細にはあまり知られていない．1720年から1740年の間に30の喜劇と二つの小説を書いた．参照：Marivaux "Das Spiel von Liebe und Zufall" Nachwort (Ivan Nagel)S.66 より
(6) 前掲書　p.4, l.15-16
(7) ibid p.4, l.31-p.5, l.5
(8) ibid p.5, l.8-l.1 1
(9) ibid p.5, l.16-18
(10) ibid p.5, l.25-31
(11) ibid p.6, l.12-14
(12) ibid p.7, l.14-17
(13) ibid p.6, l.19-25
(14) ibid p.4, l.22-27
(15) ibid p. 9, l.14-16
(16) ibid p. 9, l.2-3
(17) ibid p. 9, l.11-12
(18) ibid p. 10, l.3-4
(19) ibid p. 10, l.14-19
(20) ibid p, 10, l.29-31
(21) ibid p, 11, l.1-2
(22) ibid p. 11, l.11
(23) ibid p.12, l.4-10
(24) Eric Hobsbawn (1917-　) 英国の歴史家，19世紀を巡る三部作 "The Age of Revolution", "Europe", "The Age of Capital" 他
(25) 前掲書　p.12, l.20-21
(26) ibid p.12, l.21-31
(27) ibid p.12, l.32- p.13, l.5
(28) ibid p.13, l6
(29) ibid p.13, l.12-21
(30) ibid p.13, l.26
(31) ibid p. 14, l.1-10
(32) ibid p.14, l.17-20
(33) ibid p.14, l.25, Walt Whitman 米国作家 (1819-22) "Leasves of Grass", "I Sing the Body Electric", "Song of Myself"
(34) ibid p.14, l.28
(35) ibid p.15, l.2-3

(36) ibid p.15, l.8-14
(37) ibid p.15, l.18-23
(38) ibid p.16
(39) 「本当の望み」Volker Braun "Das wirklich Gewolte" Ausgewählte Werke 浅岡康子，市川明他共訳，2002年7月，三修社
(40) >Werkstatt Feulleton 53< "Der skeptische Dialektiker"-Ein Gespräch mit dem Schriftteller Volker Braun über die DDR, die Arbeit und das Schreiben" Februar 23, 2010.

・同じページからの連続的引用は，そのページの最後の引用に注番号を振り提示している．